

保育カンファレンスにおける臨床心理士の役割

The Role of the Clinical Psychologist in Conferences at Early Childhood Education

植田 喜樹

多様かつ複雑化する子育て家庭への支援の重要性が高まる一方、現場の保育士等の役割や負担も増えてきている。本稿では、子育て家庭や子ども達を支援するとともに、支援者である保育士を支える上で重要と考えられる保育カンファレンスについて取り上げた。臨床心理士である筆者の実践を振り返り、保育カンファレンスにおいて自身が求められる役割について検討した。保育士とは異なる専門性の立場から子ども理解の視点を提示すること、保育士のエンパワーメント、他職種との連携を図る調整役となること等が重要と考えられた。

キーワード：保育カンファレンス、臨床心理士、子ども理解の促進、保育士のエンパワーメント、他職種連携

1 はじめに

少子高齢・人口減少社会の進行に伴い、時代の変化とともに子どもが養育される家族の形態や家庭環境、地域社会の状況も少しずつ変化してきており、子育て中の家庭の孤立化と負担感がますます高まっている（金子、2019）現状がある。社会保障審議会児童部会保育専門委員会（第4回）では、「地域のつながりが希薄化するとともに、長時間労働等により父親の育児参加が十分に得られないなか、子育てが孤立化し、負担感が大きくなっている」こと、「保育サービス等の就労を支えるサービスだけでなく、就労の有無にかかわらず、すべての子育て家庭を支える取り組みが必要」と指摘されている。自身が親になって初めて子どもと関わる経験をもつ親が増えてきており、これまでは同居する親族や近所の人など身近な人から得られていた子育ての援助や知識を得る機会も減少してきている。そんな中で、ネットや書籍などの情報を頼りに手探りで子育てに奮闘する親、

ワンオペ育児といった言葉に代表されるような家事や育児の負担を全て抱えながら子育てをしている親など、支援を必要とする子育て家庭が増えてきているのが現状である。

児童福祉法第2条「児童育成の責任」においては、「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う」と規定されており、子どものみならず、保護者や家庭全体を支援する役割を担う一つとして保育所等での保育が挙げられる。西村（2019）は保育の特性について、（1）子どもの心身の発育・発達に関する専門職による保育、（2）保育は保護者とともに子どもを育てる営み、（3）子どもの心身の発達過程をふまえた保育などを挙げている。そこでは「保育所は子どもの健全な心身の発育・発達を図ることを目的とした施設」であり、そのために「必要な知識・技術をもった保育士や調理員などがその専門性を発揮して保育にあたっている」こと、「乳幼児期の子どもの育ちを支えるとともに、保護者の養育姿勢や力が発揮されるよう、保育所の特性を生かした支援を行う」こと、「保育所では子どもの発達を年齢で画一的にと

らえるのではなく、子どもの育つ道筋やその特徴をふまえ、発達の個人差を配慮して個別にいていねいにかかわるために、発達のプロセスを大切にしている」ことが述べられている。

また、エリクソンは乳幼児期の発達課題として、基本的信頼感の獲得や自立性の獲得を提唱している。それはヒトの人生の最初期において、身近な養育者との関係、家庭生活の中だけにとどまらず、乳幼児が日々多くの時間を過ごす保育所や幼稚園といった家庭外の集団生活における生活体験の重要性を示唆している。

このように、保育所等における保育は子どもや保護者、子育て家庭に対して非常に重要な役割を担っている一方で、現場の保育士の負担はますます大きくなっている。

ここで、子育て家庭や子ども達を支援し、支援者である保育士を支える上で重要と考えられるのは、保育カンファレンスである。保育カンファレンスは参加者が事例を持ち寄り、集団で検討する方法として、保育の分野で多くの実践と研究が展開されてきている(村上・青木、2018)。保育所保育指針解説においても「保育所全体での理解の共有や、担当者を中心とした保育士等の連携体制の構築に努め、組織的に取り組むことが重要」と述べられており、保育カンファレンスを通じて保育士の専門性の向上を図ったり、預かる子ども達やその家庭の状況を職員間で共有しよりよい関わりにつなげていくこと、また保育士が一人で課題や困りごとを抱え込まないようにすることが肝要であろう。また先述のように、多様かつ複雑化してきている子どもや子育て家庭への支援を考える上では保育士のみならず多職種による連携のもと支援を展開していくことが重要と思われる。

臨床心理士である筆者は勤務する自治体においてコンサルテーションとして保育カンファレンスを定期的実施している。臨床心理士の四業務の一つに臨床心理的地域援助があるが、面談や心理検査を通じて子どもや保護者を直接的に支援するだけでなく、保育士等支援者への助言・サポートを行うことで子どもやその家庭の支援につなげていく活動である。筆者は行政心理職として、所管の保育所において基本的には2か月に1回の頻度で定期的なカンファレンスを行ってきた。参加者は所長、副所長、協議する学年のクラス担任、筆者である。小規模な保育所であれば1回の訪問で全体の子どもの様子について協議を行い、児童数の多い園では、今月は年長、次回は年中…のように、毎

回違う学年の様子について検討している。

これまで保育カンファレンスについての研究は数多く発表されているが、臨床心理士と協同するカンファレンスについての実践報告や研究は少ない。そこで本稿では、筆者の実践を振り返りながら、臨床心理士が保育カンファレンスにおいて求められる役割について改めて検討することを目的とする。

次項では、カンファレンスの中でしばしば取り上げられるいくつかの課題について架空事例を提示する。

2 事例

2.1 事例1 A(年中 女児)

2.1.1 保育士からの聞き取り

マイペースで生活の流れになかなかのれない。一つ一つ指示すれば動けるが、周りを見て動いたりすることはなく、いつも終わりの方になる。たとえば、「トイレに行って部屋に戻って手洗いをしてコップを出して席につく」という流れも、トイレから戻ってくるところでかなり時間がかかる。どのような声かけをすればよいか。

2.1.2 所見と助言

日常の様子を観察する中では、Aはやや自分の世界に入りやすい、周囲への関心が薄いタイプのように見受けた。周りの動きを意識し、みんながしているから自分もしようという心の動きは起きにくいかもしれない。自身の行動についても一つ一つ指示されればできるとのことだが、いざ自分で目的をもって行動するという主体性は弱い印象である。そのため行動できたとしてもA自身が達成感を十分に感じることはできていないのではないかな。行動が遅い子どもの場合、どうしても次の行動、次の目標への意識づけや声かけが多くなってしまおうと思うが、むしろA自身がその時取り組んで出来たことを保育士が意識してAにフィードバックしていくことが重要に思う。たとえばトイレを済ませた時に「お部屋へ戻ったらどうするん?」と声をかけるのではなく、「トイレ、自分でいけたね」「スリッパ、ちゃんと揃えられたね」などAの行動を捉え、言葉にしてA

に伝えることである。A自身が、自分はこれができた！という実感を得られることで、次への意欲につなげていけるようサポートしてもらえるとよいかもしれない、と担当保育士に助言した。

2.2 事例2 B（年少 男児）

2.2.1 保育士からの聞き取り

年度初めは、手洗いや着替えなど身の回りのこと、生活の流れがなかなか定着しなかった。絵や番号で工程を示すなどの視覚支援を取り入れてみると動きはスムーズになったが、いつもと流れが変わると対応できない。持ってくるものを言葉だけで伝えたと聞いておらず、周りを見ながら準備する様子が見られる。「半分にして」という保育士の説明がわからず「はんぶんってなに？」と聞いてきたことがある。お絵描き等は家であまりしていない様子。「朝なに食べた？」等簡単な質問には答えられるものの、基本的には自分の話したいことはよく話し、問いかけには答えないなど、やりとりは一方的である。

2.2.2 所見と助言

エピソードからは、視覚優位、いつもと異なるパターンには混乱する、相互的なコミュニケーションが苦手など、自閉的な特性が感じられる。①初めてのことはまず保育士と一緒にやってみせる、②その上でできたことは適切にBにフィードバックし、Bが実感をもって体験できるようにサポートする、③口頭指示だけでなく、具体例や見本など見て分かる手がかりとともに伝える、④変更点などは可能な限り事前にBに予告し見通しを持てるようにする、⑤説明や伝達の際は名前を呼んでBの注意を話し手に向ける、⑥リトミックやボール遊びなど相手を意識してやりとりできる遊びの機会を意識的に作るなど、既に担任保育士が実践している関わりも含め基本的な対応について再度確認した。

2.3 事例3 C（2歳児 男児）

2.3.1 保育士からの聞き取り

今年度から新規で入所してきた子どもである。保育士が丁寧に関わる中で身の回りのことを少しずつ覚えてきているが、休みがちで登所したとしても遅く来ることが多いなど、生活リズムが整わない。母の仕事が休みの時にはCも休むことが多いように思われる。行事が近づき練習が始まっているが、他の子どもたちと一緒に参加できないことが多いため、積みあがりにくい。母に、できるだけ早く登所させてほしいと担任が声をかけたところ、しばらくは母も意識してくれていた様子で、以前より早い時間に登所するようになった。

2.3.2 所見と助言

保育士より母に働きかけてくれたことで改善が見られている。まずは保育士が母とコミュニケーションをとり、必要な声かけ等を既に実践されていることを労う。Cの成長の上で生活リズムを整えていくことが肝要であると伝えていくことはもちろん重要だが、今後保護者によりよい信頼関係を築いていく中で、なぜそうなっているのか、家庭での困り感はどうか、家族がどのような思いでいるのかなど、丁寧に把握していく必要があると思う。

3 考察

以上の事例を通じて保育カンファレンスに心理士が参加する意義について検討したい。

3.1 子ども理解を促す

まずは、心理の専門的な立場から、子どもの行動を分析し、考えられる事柄を整理して提示することで、保育士等の子ども理解を促す役割が考えられる。実際のカンファレンスでは、家族構成や子ども・保護者の成育歴、職歴など家庭の様々な状況を把握した上で検討を行う。そうした家族の背景も含め、目の前の子どもの状態や必要な関わりについてアセスメントすることも、心理職の専門性の一つである。

保育とは異なる専門家の立場から考えられることを提示すること、外部の目による観察・筆者が子どもと関わった中での具体的なエピソードをカンファレンスの場で共有す

ることで、日常的に関わる保育士とは違う目線から見た子どもの一面を共有することも有意義と考えられる。村上らは「保育カンファレンスでは、保育者がこれまでの方法ではうまくいかない困難を感じる事例について検討がなされる。そのため、これまでの思考や関係性から、いかに視点を変換するかがポイント」と論じている(村上・青木, 2018)。保育士が自分の知らなかった面について気づいたり、子どもの行動や気持ちを捉える際にそれまでとは異なる枠組で子どもを捉えなおすことで、より深く広く子どもを理解することができれば、よりよい保育につながるのではないかと考える。

一方、植田は「筆者よりも保育士の方が、日頃の子どもの様子的について詳しく、子どもと実際に関わる上での引き出しも豊富なため、何か新しいことやそれは思いつかなかったというような新しい事柄を筆者から伝えるのは難しいところ」であり、「保育士と子どもの様子について振り返り、筆者側から気になったことや疑問に思うことを投げ返すといったやりとりを通じて、保育士自身の気づきが促され、日々の保育を振り返る時間になればと考えている」と論じている(2021)。事例1のように具体的な関わりについて提案するケースも当然考えられるが、「具体的な助言やアドバイス以上に、支援者自身の気づきを促す場を作ること心理士の役割の一つと考えられる」。その中で、今度からはこうしてみようという、保育士の主体性が発揮されるようサポートしていくことも肝要であろう。

3.2 保育士のエンパワーメント

村上らは、心理の専門家の入る保育カンファレンスにおいては、その中心的な効果に「保育者のエンパワメントにつながる」が加わると指摘している(村上・青木, 2018)。

日々、試行錯誤しながら子どもたちと関わる中で保育士たちは、なかなかうまくいかない、これでいいのかという不安や迷い、悩みを抱えている場合もあると思われる。しかし、子どもによっては変化や成長に他の子どもよりも時間を要する場合もある。必ずしも、子どもの変化が見えにくいからといって、保育士の関わりが適切でないということではない。事例2のように、既に保育士が実践している関わりを支持し、保育士の気持ちを支えることも必要と思われる。

筆者は常勤心理職として勤務している特性上、保育士等職員との関係性を構築しやすいことがスムーズな連携につながっている面もあると考えている。定期的に保育所等を訪問できることで、子どもの様子を時々観察することができ、その都度保育士とも短い時間であってもやりとりすることで、筆者の存在を身近に感じてもらえているという実感がある。それは、保育所を訪問した際、別のクラスの担任が声をかけてくれ、気になる子どもの様子を見てもらいたい、関わりについて相談したいといった声をかけてもらうといった筆者の体験や、カンファレンスの中である保育士から「植田先生やったら、こういう時なんて言うんかなって(担当の)二人で話したりしてたんです」と言われたことなどから感じることである。筆者が保育カンファレンスを通じて今の子どもや家庭の状況を保育士と共有することで、保育士が自分一人で抱えるのではなく、筆者も一緒に抱える・考える時間を持つことが、保育士を支えエンパワーすることにつながっているものと考ええる。

3.3 他職種連携の促進

事例3のように、養育力の弱さが懸念されるケースも時には見られる。なかなか生活リズムが安定しないということは、子どもの健やかな成長発達の基盤が整いにくいということである。できれば、保育所等に安定して登所し集団生活の中で様々な生活体験を積み重ねていくことで、子ども自身が生きていく上で必要な力の基礎を培っていくことが望まれる。

その際、保護者・家庭へのアプローチは必須となるが、保育所等が単独で働きかけるだけではなく、保健師や地域の支援センターなど関係する支援者や機関と密に連携をとりながら、必要な支援・手だてについてともに検討していくことが重要である。その際、心理士はそのケース全体を見立て、必要な関わりについてコーディネートする、すなわち他職種による連携を促進する役割を担うことも重要であると考ええる。

4 さいごに

以上、保育カンファレンスにおける臨床心理士の役割について筆者の私見をまとめた。今後は、保育カンファレン

スを実施することが子どもたちの成長発達にどのように寄与しているか、保育士等の子どもへの関わりの質やモチベーションにどれほど影響しているかなど、客観的な調査による検討や効果検証が必要と考える。

引用・参考文献

- 村上葉月・青木紀久代(2018) 「心理臨床家が行う保育カンファレンスの特徴：構成メンバーの違いに着目して」『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』 第20号 pp.45-55
- 厚生労働省編(2018) 「保育所保育指針解説—平成30年3月」 フレーベル館
- 西村重稀(2019) 「子どもの保育とともに行う保護者の支援」 『子育て支援 新・基本保育シリーズ⑨』 中央法規出版 p.1-12
- 金子恵美(2019) 「保護者や家庭のかかえる支援のニーズへの気づきと多面的な理解」 『子育て支援 新・基本保育シリーズ⑨』 中央法規出版 p.25-34
- 植田喜樹(2021) 「有田市における子育て支援—臨床心理士の役割に関する一考察—」 『わかやま子ども学総合研究センタージャーナル』 No.2 pp.75-81

